平成１５年度第３回大台ヶ原自然再生検討会・森林生態系部会

◆日　時　平成１６年3月４日（木）１３：３０～１６：２０
◆場　所　春日野荘　畝傍の間
◆出席者　検討委員／１０名中９名出席
　　関係機関／近畿中国森林管理局三重森林管理署、奈良県、上北山村、
　　上北山村森林組合
　　環境省／近畿地区自然保護事務所長、自然環境計画課課長補佐、他
◆議　事
（１）平成 15 年度調査の結果と分析について
　１）植生タイプ別再生ポテンシャル調査
　２）野生動物に関する調査
　３）利用による自然環境への影響調査
（２）これまでの対策等の評価分析
（３）来年度調査計画について
（４）自然再生推進計画（案）について

◆議事概要　（会議は公開で行われた）
○資料に基づき、第２回部会指摘事項への対応について事務局より説明。
議事（１）
○平成 15 年度調査の結果と分析について事務局より説明。
○委員からの主な指摘
（植生タイプ別再生ポテンシャル調査について）
・発芽床としては、倒木・根株の存在だけでなく、コケの有無が重要な要素ではないか。
（野生動物に関する調査について）
・タイプＩ（ミヤコザサ）でネズミ目が捕獲されていないが、一般にネズミはササが生育するところを好むはず。今後も継続して調査することが必要。
・ウグイスは至るところで確認されていたが、今回全く確認されなかったのは驚きである。コノハズクはたまたま確認できなかっただけかもしれないが、シンボリックな種なので、注目していくことが必要。
・「健全な」・「衰退した」森林という表現は、人間の主観的なもの。今は森林更新のダイナミクスの後退期であり、その引き金として人為的な要因が考えられるので、それを取り除こうとしている。こうした点を踏まえて表現を工夫すべき。
・植生調査の追加等についてはニホンジカ保護管理検討会の側から当部会に対して要請されているということか。
→シカの生息密度と植生の関係を把握する上で必要との指摘があったもの。ニホンジカ保護管理計画は平成 14 年度からスタートしており、場所や計画期間等の点でずれがあるが、森林生態系とシカの問題は密接不可分なので、今後そうし

たずれは修正を図りたい。

（利用による自然環境への影響調査について）

・外来種だけでなく、ミヤコザサの被度、踏圧に強いオオバコの侵入等人の影響を図るためのデータを出すべき。

議事（2）

○資料に基づき、これまでの対策等の評価分析について事務局より説明。

○委員からの主な指摘

・ラス巻き等、早めに対策を打つべきだということが確認されたといえる。

議事（3）

○資料に基づき、来年度調査計画について事務局より説明。

○委員からの主な指摘

・モニタリング調査の内容について今回議論の対象となっていないのはなぜか。

→春夏の調査結果など、ある程度データがそろった段階で議論いただきたい。

・樹木の生育に遅滞を及ぼす要因としては、水ストレス、オゾンなど様々な要因が考えられる中で、酸性降下物だけ取り出し、しかも酸性降下物ありきの調査は客観性に疑問がある。

・酸性降下物の調査が来年度策定する自然再生推進計画にどう結びつくのかはっきりしない。

→酸性降下物の調査結果が出ないと推進計画が策定できないというものではない。計画とは別に長期的に調べていくということ。

・昆虫類は定量化されたデータが不足している。少なくとも３年は調査を継続しつつ、モニタリングの指標を考えることが必要。

議事（4）

○資料に基づき、自然再生推進計画（案）について事務局より説明。

○委員からの主な指摘

・ニホンジカ保護管理計画を取り込んで、自然再生推進計画という形で今回初めて示されたもの。今回のところは大きな項目の抜け等の指摘はないが、今後中味を煮詰めていくべきもの。

・防鹿柵について、現在議論をしている段階であるのに、平成 18 年度までに合計 85ha 設置すると決められているのはおかしい。

→ニホンジカ保護管理計画を引用しているが、本部会での議論を踏まえ、来年度は同計画では 17ha のところを木柵で７ ha 設置してみて効果を検証し、その結果を踏まえて平成 17 年度以降の計画を見直していく予定。

・大台ヶ原周辺地域を含めて考えていくことは重要。

その他

○本年９月頃を目途に自然再生推進計画を策定すること、来年度当初から試験区の設定等の作業に着手すること、来年度調査の具体的な方法等については４月初めにもワーキングループで検討願いたいこと、親検討会委員を含む現地視察を５月頃に考えていることといったスケジュールについて事務局より説明。

［文責　近畿地区自然保護事務所］